



---

第5回日中言語文化教育国際学術シンポジウム  
研究発表要旨集

---

第五屆中日語言文化教育國際學術研討會  
研究報告摘要集



2026年8月1-2日 於日本久留米大學

主催 日中言語文化教育推進會

〈海外協力大學〉

大連大學 外國語學院

廣東科技學院 外國語學院

# 从日语的训读来研究对唐诗《春望》的欣赏

林乐常（广东科技学院）

## 一、《春望》诗作背景及注释情况

《春望》是唐朝诗圣杜甫（公元712-770年）在安史之乱被掳期间写的一首诗。755年，安禄山起兵叛乱，次年长安沦陷，唐玄宗仓皇逃往四川，昔日繁华的帝都遭叛军烧杀劫掠，宫室焚毁，满目疮痍。七月，太子李亨在灵武即位，杜甫闻讯后将妻儿安置于鄜州羌村，只身北上投奔朝廷，途中不幸被俘，押解至长安困居半载。此时长安草木丛生、人烟稀少，战火连绵不绝，百姓流离失所，诗人与家人音信隔绝。757年暮春，杜甫目睹国破城荒之景，触景生情，将忧国、伤时、思家的沉痛悲愤熔于一炉，写下千古名篇《春望》。

**国破山河在，城春草木深。感时花溅泪，恨别鸟惊心。  
烽火连三月，家书抵万金。白头搔更短，浑欲不胜簪。**

杜甫一生诗作有1400多首。中国国内对“杜诗”的注本最早见于宋朝郭知达主持编纂的《杜工部诗集注》，曾噩于宋理宗宝庆元年重刻并更名为《新刊校定集注杜诗》，清代乾隆三十八年入《四库全书》后定名《九家集注杜诗》，共36卷，收诗1431首。为研究宋代注杜的重要实物资料。

## 二、《春望》传入日本及其训读

《春望》传入日本是在平安时代前期（847年），由入唐僧圆仁（794-864）自唐归国，带回二卷本《杜员外集》，为杜诗传入日本的最早实物证据。贵族与僧侣已开始学习杜诗，但无《春望》汉语日文训读（書き下し文）的明确记录。据推测，《春望》的训读最早时期应在镰仓末期一室町初期即13-14世纪五山文学全盛期。此时已存在《春望》的训读与書き下し文，但无署名作者的固定译本流传至今，多为寺院钞本、口传或讲义记录。现存最早带《春望》训读的文献，多为14-15世纪五山僧的汉诗讲义或钞本，译者佚名。

最早有明确影响的《春望》日文改写（非纯書き下し）情况，有江户时代松尾芭蕉在《奥の細道》平泉段化用《春望》首联，作“国破れて山河あり、城春にして草青みたり”，为五七五七七调，虽非严格意义上的“書き下し文”，但直接基于传统训读，成为后世《春望》日文训读的基准文本。

《春望》的训读从五山僧开始（以下称“五山期”），到江户时代定型（以下称“江户定型”），其训读略有不同（见下表），以至于后世日本中小学汉文教科书的《春望》训读都沿用江户汉学塾定型的训读。

表1 五山期与江户定型《春望》的训读对照表

五山期	江户定型
くに やぶ やまかわ あ 国 破れ 山河 有り	くに やぶ やまかわ 国 破れて 山河 あり
じょう はる くさ き ふかし 城 春 けて 草木 深	しろ はる くさ き ふか 城 春 にして 草木 深し
とき かん はな なみだ なが 時 を 感じ 花 涙 を 流す	とき かん はな なみだ 時 に 感じて 花 涙 を そそぐ
わか うら とり ころ おどろ 別れ を 恨み 鳥 心 を 驚く	わか うら とり ころ おどろ 別れ を 恨んで 鳥 心 を 驚かす
ほう か さん げつ つづ 烽火 三月 に 続く	ほう か さん げつ つら 烽火 三月 に 連なり
いえ しょ まん きん まさ 家書 万金 に 勝る	いえ しょ まん きん あた 家書 万金 に 値す
はく とう かい さら みじか 白頭 搔て 更 に 短し	はく とう か さら みじか 白頭 搔けば 更 に 短く
まった かんざし はい 全く 簪 に 入らず	まった かんざし た 全く 簪 に 堪えず

两者对照可以看出，五山期的训读特征是文法老拙、用語直白、助詞活用不規範，而江户定型的训读特征是助詞用法規範，統一文語活用，雅化詞句用詞，修正了語義偏差。

### 三、从日语的训读来欣赏《春望》

对于《春望》的意思理解，无论是在中国还是日本，都不尽相同。在此，就日语训读（書き下し文）的不同来分析一下对《春望》的理解。

《春望》的日语训读，除了前述的江户汉学塾定型外，一般常见的还有下面的训读。

くに やぶ やまかわ あ  
国 破れて 山河 在り

しろ はる そう もく ふか  
城 春 にして 草木 深し

とき かん はな なみだ そそ  
時 に 感じては 花にも 涙を 濺ぎ

わか うら とり ころ おどろ  
別れを 恨みては 鳥にも 心を 驚かす

ほう か さん げつ つら  
烽火 三月に 連なり

か しょ    ばんきん    あ  
家書    万金に    抵たる

はくとう    か    さら    みじか  
白頭    搔けば    更に    短く

すべ    しん    た    ほっ  
渾て    簪に    勝へざらんと    欲す

（向嶋成美編集『李白と杜甫の事典』大修館書店 2019）

这种训读（在此权且称为“最新型”）与江户定型的训读相比，又有明显的不同之处，具体来说有以下三点不同：

一是颌联“感时花溅泪，恨别鸟惊心”的训读，动词“感”和“恨”的训读，后面增加了“は”。从语法的角度来看，日语“动词+ては”表示动作的反复，相较“感じて”和“恨んで”，“感じては”和“恨んでは”可以感受到诗人在荒废的京都不止一次看到盛开的花朵，不止一次听到鸟儿惊飞。因此，“最新型”的翻译应更符合当时的情境，更符合诗人的心情。

二是颌联中的“花”“鸟”后面都加上了助词“にも”。这两处在五山期和江户定型的训读中都没有加助词。没有加助词，一般可以理解为主语，相当与省略了助词“が”，因此，有研究者认为是“花”在流泪，是“鸟”在惊心，是拟人化的表现。这种理解也不是不可，但中国人可能不会有这样的感觉。“花にも涙を濺ぐ”的“に”可理解为原因，“鳥にも心を驚かす”的“に”在使役句中表示外力实施者。

“花”和“鳥”后加上“に”再加上“も”，连同前面的“ては”的使用，将诗的意境和诗人的心态如同3D一样描绘得更加清晰。

三是尾联“浑欲不胜簪”的训读。五山期和江户定型的训读可以说基本一样，比较简朴易懂，而最新型则将“浑”和“不胜”的训读都完美地解决了，将诗人的感情体现得更细致周到。

《春望》的汉文日语训读（書き下し文）从平安时代到江户时代再到现代，经过了大约经历了五六百年的演变的历程，可以看出日本人对《春望》的理解愈加完美，对我们理解杜诗是一种有益的借鉴。

## 時間メタファー理論に基づく

### 脳卒中患者の時空間認知に関する神経心理学的研究

鄭新爽（大連大学）

伝統的な時間メタファー理論においては、人間は具体的かつ経験可能な空間領域を通して、抽象的で直接的に知覚できない時間領域を理解すると想定されている。このような認知のプロセスは、様々な言語における時間表現にも反映されており、言語間の比較分析を通してその普遍性が検討されてきた。しかしながら、時間概念の理解には、はたして空間概念が必然的に介在するのであろうか。この問いは、時間認知の基盤をめぐる理論的検討において核心的な位置を占めている。

本研究では、特定の空間認知機能に関連する神経領域（例：頭頂葉など）に損傷を有する脳卒中患者を対象として、時間認知に関する実験的検討を行う。このアプローチにより、時間概念の処理、とりわけ空間表現づけの時間表現（例：「前日」など）の理解プロセスが、空間概念の活性化を前提として成り立つのか否かを、すなわち、空間認知機能の障害が時間認知にどのような影響を及ぼすかを分析することで、時間概念の理解に対する空間概念の関与の必然性を実証的に検証する。

これにより、時間メタファー理論が想定する「時間理解における空間概念の媒介性」の妥当性を評価し、当該理論の説明力とその普遍性に対して批判的検討を加えることが本研究の目的である。特に、空間表現づけの時間表現の理解が、空間認知の障害によって選択的に損なわれるか否かを明確にすることで、空間表現づけの時間概念が空間概念から独立して処理されうる可能性についても考察する。このことは認知言語学や認知心理学における概念構造の理論的基盤に対しても重要な示唆を提供するものと期待される。

# 『宮廷の諍い女』における宮廷秩序の言語表象

## —日本語字幕にみる秩序表象の再構成

王思嬈（武蔵野大学・院）

本研究は、中国宮廷ドラマ『宮廷の諍い女』（原題『甄嬛伝』）を対象に、日本語字幕において宮廷秩序を支える言語表現がどのように再構成されているのかを明らかにすることを目的とする。従来の字幕翻訳研究では、文化語彙、詩句、含意表現などに注目した考察が多く、宮廷劇に固有の呼称体系、礼儀表現、さらに規矩を体現する応答形式を、権力秩序の表象という観点から統一的に扱った研究は十分ではない。とりわけ宮廷劇においては、人物関係や上下秩序が単に物語背景として存在するのではなく、呼称・自称、定型的な挨拶や謝罪、答礼、処遇や処罰を告げる制度的表現を通じて、場面ごとに反復的に構築されている。したがって、これらの言語表現を個別の語彙や訳語の問題としてではなく、秩序表象を担う体系として捉える必要がある。

本研究は、『宮廷の諍い女』前半部（第1話～第10話）のうち、入宮、請安、合宮謁見、侍寝、賞罰、位階変動など、秩序の生成と可視化が集中的に生起する場面を対象とする。分析単位は逐語の一文対応ではなく、場面の中で一定の機能を果たす「機能単位」とし、①呼称・自称、②礼儀表現、③規矩性を帯びた応答、④侍寝の指名、処罰、位階変更など制度的手続を示す表現、の四層に分けて検討する。

本研究が重視するのは、字幕が何を削ったかを列挙することではない。むしろ、日本語字幕が宮廷秩序を一様に簡略化しているのではなく、秩序情報の種類に応じて異なる処理を行っている点に注目する。予備的分析からは、呼称・自称や礼儀表現は、現代日本語の丁寧表現へと平板化されやすく、人物間の上下関係や親疎の調整機能が弱まる一方、侍寝の指名、処罰、位階変更のように物語の進行や制度的判断に直接関わる表現は、比較的保持されやすいことが確認できる。この差異は偶然ではない。呼称や礼儀の一部は、服飾、身体姿勢、視線、立ち位置、空間配置などの映像情報によって補完可能であるのに対し、制度的手続に関わる情報は、字幕上で明示されなければ理解しにくいからである。すなわち、日本語字幕は宮廷秩序を単純に削除しているのではなく、言語が担っていた秩序情報の一部を映像へ委ねながら、理解に不可欠な制度情報を優先的に保持することで、秩序表象を選択的に再構成しているのである。

以上を通じて、本研究は、中国宮廷ドラマ字幕を「文化語彙の欠落」としてではなく、「秩序表象の再文脈化」として捉え直し、異文化受容における字幕の機能を再考する視角を提示したい。

# 日中味覚形容詞「甘い／甜」の否定的メタファーに関する対照研究

彭詩媛（大連大学）

認知言語学において、メタファーは人間の身体経験に基づいて形成されると考えられている。特に味覚は、視覚や聴覚と同様に基本的な身体感覚の一つであり、日常的な経験を通して人間の認知や感情理解に深く関わっている。そのため、味覚形容詞を用いたメタファーは、身体経験が抽象的思考や心理的評価にどのように写像されるかを示す重要な事例として注目されてきた。

日中両言語における「甘い／甜」という味覚形容詞も、単に味覚経験を表すにとどまらず、心理的・評価的な意味を伴う多義的な用法を持つことが知られている。例えば、日本語の「甘い」には「考えが甘い」「見通しが甘い」のように、物事に対する判断や評価が不十分であることを示す否定的意味が存在している。一方、中国語の“甜”では、肯定的な意味が中心であり、“甜蜜”“甜美”のような幸福感や喜びを表す語が一般的である。しかしながら、特定の文脈、例えば“甜言蜜語（甘いことば）”や“甜头（甘味）”においては、言葉や利益に惑わされて失敗や損失を招くといった否定的な意味が付加されることもある。このように、両言語における否定的メタファーの出現パターンは異なり、単なる味覚経験の共有だけでは説明できない差異が存在している。

本研究は、これらの日中味覚形容詞における否定的メタファーの差異に着目し、その形成メカニズムを認知言語学の視点から明らかにすることを目的とする。具体的には、辞書的基本義の分析、典型例の収集と整理、さらにメタファーの認知プロセスの分析を通して、なぜ同じ「甘い」という味覚に基づきながら両言語で異なる方向へのメタファーが形成されたのかを検討する。

# 太湖片呉語における入声韻尾の実現様態と舒声化

## —持続時間とスペクトログラムに基づく共時的変異の分析

謝 孫煒（北海道大学大学院）

従来の呉語研究は音韻体系の記述や変調分析が中心であり、入声韻尾の変異過程に関する定量的根拠は十分に示されてこなかった。現代呉語における入声韻尾は、声門閉鎖音への合流が指摘されているものの、その後の弱化・脱落の過程は一律ではなく、閉鎖の有無といった二分的な枠組みでは捉えきれない連続的変異が存在する。本研究は実験音声学的手法を用い、持続時間とスペクトログラムの分析を通じて入声韻尾の弱化過程を再検討する。

本研究では、呉語太湖片出身の計 11 名（24-61 歳）をインフォーマントとして調査を行った。テストに使用した字は、音響的な変数を厳密に統制するため、介在音および鼻音韻尾を一切持たない「単母音 /o/ (+入声韻尾)」という音節構造の字のみを抽出した。陰平から陽入までの 8 つの声調を網羅する計 29 語を選定し、各語 3 回ずつの発音を分析対象とした。

音声分析ソフト Praat を用い、持続時間の測定とスペクトログラム上の変異パターンの観察を行った。①持続時間の視点からは、全インフォーマントにおいて陰入が最短であった。一方、陽入については変異が見られ、大半のインフォーマントは陰入に次ぐ最短の持続時間を示したが、インフォーマント 3 名においては陽入の持続時間が舒声と混同していた。②また、スペクトログラム上の変異パターンに基づき、入声韻尾の実現様態を「喉頭化残存型」、「平滑減衰型」、「完全舒化型」の 3 タイプに分類できる。F1-F5 の減衰後に独立したパルスや振幅の急激な変動が観察される「喉頭化残存型」に対し、「平滑減衰型」は高域成分が先行して消失し低域成分が整然と収束していく非同期的な消滅を特徴とする。一方、「完全舒化型」は F1-F5 が同期的に消失し、その過程が舒声母音と区別できないものを指す。考察の結果、入声の舒声化プロセスにおける「短調」は、「平滑減衰型」、および「完全舒化型」のうち発音持続時間の短縮が維持されているものの両者が内包されていると考えられる。③持続時間と韻尾の実現様態を合わせた分析から、太湖片呉語における入声韻尾の深刻な脱落实態が明らかとなった。陰入は閉鎖動作が極めて弱化しており、物理的韻尾を喪失しつつもエネルギーの衰減パターンによって入声性を維持する段階にある。対照的に、陽入は音響的に舒声と区別できない「完全舒化型」が約 47%に達しており、もはや韻尾の痕跡ではなく母音の持続時間の短縮のみによって入声性が体现されている。

したがって、本研究は、呉語における入声の舒声化が「韻尾の物理的消失」から「音響的な減衰パターンの変異」、そして「持続時間の制御」へと段階的に移行するプロセスを実証的に示したといえる。

## 后置介词结构中介词脱落：类型与后果

崔云忠（青岛大学）

文章从语法化和论元结构角度区分了后置介词结构中介词脱落的三种类型：介词完全脱落、介词并入式脱落和介词语境内脱落。介词完全脱落和语境内脱落，原介词支配处所、时间、对象等旁格论元的能力被动词吸收，动词增元或动宾短语词汇化，动补结构发展为动宾结构。并入式脱落的后果是介词参与构词，产生大量“动介”复合词或合音词（字），原介词功能和语义均由“动介”复合词或合音词（字）吸收；动补结构发展为动宾结构。后置介词结构中，介词的脱落是并行的两条路径，介词语境内脱落是介词完全脱落的共时表现，即：介词>语境内脱落>完全脱落；介词并入式脱落是发展为构词语素的语法化路径，合音化后形式也消失，完全脱落，即：介词>构词语素（并入式脱落）>合音。

后置介词结构，即介宾短语位于谓词性成分后的“动·介·宾”结构。介词脱落，是“动·介·宾”结构中，介词失去介引能力或者消失的情况。后置介词结构是汉语常见结构，学界对其关注较多，如张赫（2002）系统梳理了“介·宾”语序发展趋势，崔云忠（2021）研究了后置介词结构中介词语法化的层次性。吕叔湘（1999：19）、胡裕树（2011：296）讨论了“动·介·宾”结构中“动·介”的性质，吕先生认为，“把动词加介词整个地当作一个复合动词”，胡先生认为其“相当于一个动词”。邢福义（1997）讨论了该结构中介词的语法性质，认为该结构中的介词“转化为”“准动词”。

既有研究勾勒了后置介词结构及其构成成分的性质。对该结构中“介”的性质，诸位先生虽着眼点不同，但意见大致是一致的，即“动·介”有动词属性。但是对于该结构中“介”的运用情况关注不够。

《马氏文通》（2017：151）提出：“‘教’‘告’‘言’‘示’诸动字后有两止词，一记所语之人，一记所语之事。先人后事，无介字以系者常也。”储泽祥（1996）总结了介词“在”隐现的三种情况以及制约介词“在”隐现的四个因素；林华东等（2005）考察了介词“在”在动词后的隐现的过程及句法后果；朱赛萍（2014）从韵律角度分析了VO后PP中介词隐现的问题。陈昌来（1998）讨论了工具成分在话语中的隐现情况；汪缚天（1997）、陈信春（2001）均对介词隐现做了系统梳理。刘兵（2005）、袁静（2007）等借鉴格语法理论、语法化理论讨论了介词隐现的制约因素。上述研究均关注到后置介词结构中介词是可以不出现的，但对介词脱落的类型及介词脱落后句法结构的变化没有充足的讨论。

**关键词：**后置介词结构；介词脱落；类型；后果

# 人工智能视角下中日文学作品中感觉形容词的翻译研究

刘蓓（大连大学）

随着人工智能技术的不断发展，其在文学翻译领域的适用性逐渐成为学界讨论的热点。现有相关研究大多围绕机器翻译的通用性能展开分析，针对特定语言现象的深入探讨较为缺乏，尤其对于兼具文化内涵与身体感知属性的感觉形容词，现有成果较少考察机器翻译对这类词汇的文学性转化能力。本文选取中日现代小说互译中的感觉形容词作为研究对象，分别使用人工智能工具进行翻译，并与名家人工译本进行对照。通过多方面对比分析，考察人工智能在文学翻译中的实际表现与不足之处。

研究结果显示，AI 译本在语义翻译准确性、语句表达通顺度方面表现较为稳定，但在处理感觉形容词时，呈现出三方面明显特征：第一，翻译策略偏向中庸化，多选取词义最为通用、稳妥的中间义项，导致原文词汇的多义性与修辞张力被弱化；第二，文化意象处理过于直白显性，将原文中含蓄表达的身体性感受，拆解为逻辑明确的描述性语句，降低了文学文本的韵味与审美留白空间；第三，句法构建上习惯补充完整逻辑主语，把日语中侧重氛围营造的描写句式，转化为中文的说明性句式，在一定程度上改变了原文的叙事节奏与情感基调。对比来看，人工译本在词汇选择的创造性、文化内涵传递的技巧性以及身体感知表达的共情性方面，展现出更强的灵活性与审美自觉性。

本研究的理论意义在于，通过对感觉形容词这一具体词汇类别的分析，揭示出机器翻译在处理带有身体感受、文化内涵的表达时存在的固有缺陷，为机器翻译与文学翻译的相关研究提供了可量化的实际依据。在实际应用方面，研究结果有助于完善文学翻译中的人机协作方式，也能为提升机器翻译的文学处理能力提供参考。

关键词：人工智能；文学翻译；感觉形容词；

## 浅谈新时代短期来华留学项目品牌建设——以南开大学为例

孙伟（爱知大学孔子学院）

高等教育国际化是教育强国战略的必由之路，是提高国家软实力和国际竞争力的重要路径。来华留学教育作为高等教育国际化的重要组成部分，其中，短期来华留学项目是来华留学教育最活跃的组成部分。语言文化类项目是短期来华留学项目的主体，由中文学习和中华文化体验构成，因形式灵活、内容丰富趣味性强，一直以来深受世界各国青少年中文学习者的喜爱。

当前，随着中国高等教育对外开放和“留学中国”品牌建设不断深入，各高校密集承接、承办各类短期来华留学项目，中外教育人文交流日益密切的同时，也面临诸多挑战，如项目定位不清晰，办学效益不明显，接待服务能力不足等，在一定程度上制约了来华留学事业的高质量发展。

南开大学作为新中国最早一批接收留学生的高校之一，国际中文教育专业底蕴深厚，在中国教育部第四轮学科评估中，南开大学汉语国际教育专业被评为A级，居于中国前列。历经多年积累，南开大学拥有类别丰富、特色鲜明的短期来华留学项目，在国内外享有崇高声誉。

在短期来华留学项目整体同质化的趋势下，南开大学国际教育学院和汉语言文化学院作为留学生招生、管理和培养的归口部门，统筹规划，凝聚力量，以讲好中国故事、传播好中国声音、促进中外交流为己任，同国际组织与全球南方研究院等校内各部门紧密配合，充分发挥特色优势，利用现有教学科研载体，组织实施高级别短期来华留学项目和国际人才短期来华交流项目，讲好中国故事，传播中国声音，分享中国经验，实现共同发展，为中外文明交流互鉴，构建人类命运共同体贡献南开智慧和南开力量。

中外交流的未来在青少年，青少年是来华留学的参与主体。短期来华留学项目是世界各国青少年了解中国的窗口。截至目前，经过各部门共同努力，南开大学已建成学历留学和短期留学相互促进、相得益彰的全方位来华留学服务体系，形成引得来、留得住、多层次、宽领域的“留学南开”事业发展新局面。

今后，南开大学将精益求精、追求卓越，持续提升各类留学项目的美誉度和影响力，为建成兼具国际竞争力与文化影响力的“留学南开”品牌，为新时代推动来华留学事业和中外教育人文交流高质量发展，为中外文明交流互鉴和构建人类命运共同体贡献力量。

# 中国文化教育プログラムが学習動機および学習成果に与える影響

## —京劇講座の実践に基づく検討

翟勇（静岡大学）

本研究は、大学における文化教育プログラムが学習者の学習動機および学習成果に与える影響を検討することを目的とする。第二言語習得研究においては、学習動機の重要性が指摘されており、Gardner（1985）の統合的動機づけ理論に加え、Dörnyei（2005）によるL2動機づけ自己システム、さらにRyan & Deci（2000, 2017）による自己決定理論の枠組みが広く用いられている。本研究では、これらの理論的知見を踏まえ、文化教育の教育的効果を分析した。

対象は、2025年10月から11月にかけて実施された中国文化公開授業（京劇講座、全3回）であり、延べ参加者数は288名であった。講座は①京劇の歴史、②芸術的特徴、③日中比較（臉譜と歌舞伎の隈取）という三段階構成で実施され、視覚資料や映像を活用した体験的学習を取り入れた。

教育効果の検証には、講座後アンケートおよび自由記述データを用いた。その結果、「中国文化への理解が深まった」と回答した学生が多数を占め、多文化理解の深化が確認された。また、「さらに学びたい」とする回答も多く、内発的動機づけの向上が示唆された。さらに、講座参加者のうち中国語関連科目履修者を対象に、関連評価データを比較した結果、文化理解および語彙理解に関する設問の正答率において一定の向上が見られた。また、期末評価においても、講座参加者は非参加者と比較して高い傾向を示した。

これらの結果は、文化的知識の習得が学習動機の向上を介して学習成果にも影響を与える可能性を示すものである。特に、京劇の視覚的要素（臉譜・衣装・映像）を活用した学習は、理解の具体化を促進し、知識の定着に寄与したと考えられる。また、日中比較の導入により、文化間の差異と共通性への理解が促進され、比較文化的視点および思考力の育成にも寄与した。さらに、中国語未履修者においても言語学習への関心の向上が確認され、文化教育が言語学習動機の形成に重要な役割を果たすことが示唆された。

以上より、本実践は①多文化理解の深化、②内発的動機づけの向上、③比較文化的思考力の育成、④学習成果の向上という点において有効であると考えられる。今後の課題としては、統制群を設定した検証および量的データの精緻化により、教育効果の因果関係を明確化する必要がある。

### 参考文献

Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. Edward Arnold.

Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Lawrence Erlbaum.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25(1), 54–67.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Press.

# 日本語母語話者における中国語口語能力の影響要因に関する研究

## —対話媒体に基づく実証分析

劉秋文（東京外国語大学・院）

### 1. 研究概要

本研究は、日本語を母語とする上級中国語学習者を対象に、学習媒介の違いが口語能力に与える影響を検討することを目的とするものである。具体的には、学習者4名を対象とし、オンラインビデオ会議システムを用いた対話およびメタバース環境における対話を観察し、それぞれの発話に見られる特徴および共通点を分析する。

### 2. メタバースと言語教育

メタバースは単なるVR空間ではなく、現実世界と仮想世界を融合した3D学習環境として定義されている。学習者はアバターを介して参加し、仮想的な学習場面、学習資源、NPC、学習ログ、学習分析などを活用しながら、時間や場所の制約を超えて学習できるとされる。Zhang, Chen, Hu, and Wang (2022)では、教育環境としてのメタバースの定義、技術基盤、特徴、応用可能性、課題、今後の研究課題を提示している。

本研究では、メタバースは単に「新しい媒体」というだけではなく、第二言語不安の軽減、発話機会の増加、対話場面の具体化、継続的練習の促進という観点から、中国語口語能力に影響を与えうる媒介として位置づけられる。

### 3. 学習者コーパス

本研究で使用する中国語学習者の会話データは、東京外国語大学において中国語を専攻する日本語母語話者によって構成された縦断的対話コーパスに基づくものである。本研究では、そのうち4名の学習者を対象とし、2026年3月より収集されたデータを用いる。具体的には、オンラインビデオ会議システムによる対話およびメタバース環境における対話を分析対象とする。実験は、一対一の形式で実施され、メタバース対話は30分間、オンラインビデオ会議による対話も30分間行われた。会話の主題は、中国大陸・台湾・日本に関連する「大学入試、大学生活、食文化、観光、医療」等で、使用された中国語・日本語両言語による教材は、中国語母語話者および日本語母語話者の学生によって共同作成されたものである。なお、学習者は会話前に中国語作文を作成し、それを対話の準備とすることが求められた。

### 4. 結論

本研究の中間結果から、学習媒介の違いによる影響として、Zoomは発話のタイミングや会話の進行のしやすさにおいて優位であり、学習者にとって話しやすい環境であることが示唆された。一方で、メタバース環境はアバターを介した参加により対話不安を軽減し、外国語対話への心理的ハードルを低下させる効果が認められた。メタバースでは「同一空間にいる感覚」や没入感が強く、学習者は相手の視線や表情に過度に影響されることなく、発話内容に集中しやすい傾向が見られた。しかしながら、操作負荷や発話タイミングの取りにくさといった要因により、必ずしも話しやすさの向上には直結していないことも明らかとなった。

#### 参考文献

Chen, C.-Y., Chang, S.-C., Hwang, G.-J., and Zou, D. (2021). *Facilitating EFL learners' active behaviors in speaking:*

*a progressive question prompt-based peer-tutoring approach with VR contexts.*

Luo, Han (2014) *A Measure of Chinese language learning anxiety: Scale development and preliminary validation.* Chinese as a Second Language Research, 3(2):147-174. Interact. Learn. Environ. 30, 1-20.

李相穆 (2022) 「メタバースを利用した外国語学習に関する研究」『言語科学』NO. 57, pp. 55-60, 九州大学大学院言語文化研究院

元田静 (2005a) 『第二言語不安の理論と実態』 溪水社。

## 『基礎日本語 I・II』における知識グラフの構築

韓春紅、江晶瑤、鄭宇超（黒竜江大学）

《基础日语 I、II》是日语专业最核心的课程，是所有日语课程中学分最高的课程，授课对象为日语专业一年级学生。为实现本课程的教育数字化，课程团队构建了课程配套的知识图谱。本研究旨在通过详解知识图谱建构来探究其在推进《基础日语 I、II》课程教育数字化方面的功效。

首先，改变传统的以语法体系为规范的教学设计模式，依托日语教育评价体系 Can-do，构建了以学生能力培养为基准的课程知识图谱。该图谱根据学生能力培养分为输入、输出、互动、文本、发音与正书法五大一级节点，一级节点后面附带若干个二级节点（能力），二级节点后面又附带若干个三级节点（情景），三级节点后面还附带若干个四级节点（词汇、语法、句型等）。由此可见，知识图谱将《基础日语 I、II》零散的知识点构建成本层级的知识网络，形成结构化知识体系。

其次，在学校自主学习平台搭建知识图谱，建构出课程知识网络。通过关联音频、视频、图片、文档等数字化教学资源，优化学生在线学习资源，为学生提供精准资源服务，有助于培养学生自主学习能力和实现学生个性化学习。同时，通过知识点关联功能，实现词汇、语法、句型、翻译、日语主题讨论、AI 实践等专项训练反向迭代知识图谱，从而不断优化知识图谱内容，更好地服务于学生个性化学习。

最后，学生通过知识图谱，能够了解本课程的知识点、重难点和课程思政点等，并根据能力培养指标再结合教科书情景将知识点串联贯通，架构出了一套完整的知识体系。如此，学生依托知识图谱习得在线学习资源，完成线上语言输入+输出能力训练，根据数据反馈，实现“发现问题——定向强化——提质增效”的正循环，从而达成学生数字化学习的最终目标。同时，教师将线上任务纳入课程形成性评价体系，实现了课程教育数字化的闭环。

# 異文化理解が中国語学習の動機づけと学習ストラテジーの多様化に与える影響

## —文化導入型文法指導の実証的検討

張文青（立命館アジア太平洋大学）

本研究は、認知言語学の社会文化的アプローチと第二言語習得研究における情意要因の枠組みを統合し、「文化理解を中核に据えた文法指導」が学習者の動機づけおよび学習行動に如何なる変容をもたらすかを実証的に解明することを目的とする。従来の中国語教育においては文法指導と文化理解が分断的に扱われる傾向が指摘されてきたが、本研究では両者を有機的に統合した教授モデルを提示し、その教育効果を実証的に検証することで、新たな教育アプローチの有効性とその実施方法を提示することを目指す。

具体的には、中国語の難関文法項目である受け身文（「被」構文）および複文における接続詞指導の各段階において、当該文法と密接に関連する中国の文化的背景を体系的に導入する。実施方法としては、中国語初中級・中級学習者を対象に、約1か月半（全10回）の授業実践を行い、各回において文化内容と言語形式を統合的に提示することで、学習者の統合的動機および道具的動機の変化を段階的に測定する。

さらに、本研究は、文化導入型文法指導が（1）情意要因、（2）学習ストラテジーの多様化、（3）学習成果および熟達度に与える影響を多面的に分析する。特に、教員と学習者による協働的学習（発表活動・相互評価）およびCan-Do Listの共同作成と運用を通じて、学習者の自己調整能力の発達過程と主体的学習への移行を可視化する方法を検討していきたい。

本研究では、量的データ（質問紙調査・達成度評価）と質的データ（リフレクション・発表内容分析）を組み合わせた混合的手法を用い、文化理解の深化が学習者の内的動機づけをどのように喚起し、持続的な学習行動へと転化していくかを検証したい。

本発表では、以下の三点を中心に報告する。

- (1) 文化導入型授業が学習意欲および情意要因に与える影響、学習成果への影響
- (2) 異文化理解の深化が学習動機および学習ストラテジー選択に及ぼす効果
- (3) 協働学習とCan-Do Listの活用が自律学習および生涯学習志向の形成に果たす役割

本研究は、調査結果の分析に基づき中国語教育における「文化と文法の統合モデル」を提案するとともに、異文化理解を基盤とした持続可能な学習動機づけの設計指針を提示する。さらに、言語教育における文化導入の実践的枠組みを再構築し、学習者の主体性および学習の持続性を高めるための教育的示唆を明らかにすることを目的とする。

## 二战时期日本殖民地日语教育的电影表征

### 一以台湾殖民时期电影为中心

林乐青（九州共立大学）

本研究以台湾殖民时期制作的电影《サヨンの鐘》（1943）与《乙女の橋》（1941）为中心，结合二战时期日本在台湾推行的日语教育政策及其社会实践，探讨殖民地日语教育如何通过影像被建构、再现并内化为“帝国主体”的认同机制。既有研究多从教育史或语言政策角度讨论殖民地日语教育，指出其作为“国语教育”的同化功能与皇民化政策之间的密切关联；亦有研究揭示战时日本语教育在战后学术叙述中被正当化与去政治化的倾向。然而，将语言政策与电影影像表征结合起来加以分析的研究仍相对不足。

台湾自 1895 年成为日本殖民地后，“国语”教育被确立为殖民统治的核心工具。尤其在 1930 年代后期皇民化政策强化背景下，日语不仅是沟通工具，更被赋予“精神同化”与“忠良臣民养成”的意识形态功能。本论文通过对《サヨンの鐘》中殖民地台湾当地中国儿童在日常生活中学习日语的叙事结构分析可以发现，日语能力被建构为忠诚、文明与现代性的象征；而在《乙女の橋》中，多次出现男孩学习的场景，通过学习进入帝国秩序，其语言能力直接关联其道德评价与社会位置。电影中的日语学习场景往往呈现为明朗、纯洁、进步的空间，与“未开化”或“传统”的他者形象形成对照，从而在视觉层面完成“语言—文明—帝国”三位一体的象征建构。

本研究借助影视文化分析理论，分析日语如何在电影中作为权力技术运作：一方面，日语学习被自然化为个人成长与社会上升的路径；另一方面，未掌握日语的主体则被边缘化。影像并非单纯反映现实教育状况，而是参与塑造殖民社会的语言等级秩序。此外，从文化记忆与传播机制角度来看，《サヨンの鐘》等影片通过巡回放映与媒体报道，将“模范日语学习者”形象扩散至台湾社会，强化了日语作为“威信语言”的象征意义。

通过教育史材料与电影文本的交叉分析，本文指出：二战时期台湾的日语教育不仅是一项制度性政策，更在电影这一大众媒介中被美学化与情感化，成为构筑殖民认同的重要文化机制。电影所塑造的日语学习形象，既掩盖了语言强制的暴力性，也在观众情感层面完成对帝国话语的内化。本研究尝试将殖民地语言政策研究与影像研究结合，揭示战时日本殖民地日语教育的视觉建构方式及其社会影响，为重新思考语言、权力与殖民现代性之间的关系提供新的视角。

# 谷崎润一郎的中国想像与书写

## —以《麒麟》、《秘密》、《人鱼的叹息》为中心

陈云哲 陈林妍 王宝琪（吉林大学）

日本唯美派文学大师谷崎润一郎，毕生创作了众多优秀的作品，有以官能崇拜为核心的美学体系；有唯美主义与古典美学嫁接演绎的终极命题；有家族叙事重构的物哀美学；同时也有与中国古典深刻而复杂的对话形成的中国书写。

中国书写相关作品群是其创作不可忽视的一个部分。日本大正时代，由于铁路网在某种程度上的完善以及旅行社方面对中国旅游的安排，使得周游中国成为可能，中国成为一个距离不很遥远的国度。谷崎润一郎于1918年、1926年两次踏上中国之旅，不仅创作了十几篇游记、随笔和小说，同时也为未来中日文学艺术界的交流搭建了桥梁、奠定了重要的基础。其实，在谷崎真正触摸到现实中国社会之前，在他的文学作品中就已经出现了关于中国的文学叙事，比较有代表性的作品有《麒麟》、《秘密》以及《人鱼的叹息》等小说。

《麒麟》1910年发表于《新思潮》，是一部取材于中国古典文学的杰作。小说以中国古代春秋时期为历史背景，讲述了南子夫人与孔子之间的故事。作家在关于孔子的形象塑造中加入了一位妖魔化的女性，并以道德伦理对感官享乐的超越完成了孔子形象塑造。《秘密》1911年发表于《中央公论》，由该短篇可窥得谷崎对中国形象的想象性建构。但是，当时的谷崎毕竟尚未踏足中国，因此，谷崎在下笔之时，难免出现不自然、不准确的表达方式。《人鱼的叹息》1917年发表于《中央公论》，这是继《麒麟》、《秘密》之后的又一部以中国为题材的作品，这部作品将《麒麟》取材于中国古典的手法和《秘密》以近代中国为时代背景的表现方式相融合，是一部亦古亦今的作品。

三部小说或是以古代中国，或是以同时代中国为叙事舞台，或是从中国古代历史文化、古典文学作品想像中国、书写中国。彼时谷崎自己虽未亲至中国，却凭借青少年时期所接触到的中国传统文化和文学作品中象征中国的表意符号构建出一个异国背景。三部作品体现了谷崎基于想象的中国书写，也体现了童年生活经验和童年记忆作为作家话语资源的重要意义。聚焦谷崎的中国作品群，又会发现，中国想像贯穿谷崎关于中国书写的创作始终。

# 佐藤春夫的“中国趣味”与中国古典相关创作

## —以《李太白》为中心

孫天琪（北京科技大学）

佐藤春夫自幼便在父亲和友人的影响下与儒学等中国传统文化、古典文学结下了深厚的渊源，他曾在《论语的趣味》一文中写道少年时期曾向父亲学习《论语》，从而逐渐产生“中国情趣”。正如增田涉（1903-1977）指出的那样，“佐藤氏开始追忆唐朝的舶来品——中国的文房四宝、茶具等工艺品，以及不知从什么时候开始传给佐藤氏的‘中国情趣’。在这样的家庭环境下，他开始倾向于中国文化。”<sup>1</sup>佐藤春夫的汉学素养乃至造诣之深厚可见一斑。同时，这也反映着当时日本一部分知识分子的认知现状，即1868年一代的知识分子是能够朗读汉文书籍的最后一代。加藤周一（1919-2008）指出他们其中的一部分具有“传统主义”特征，“在出色地保持文化与传统的关系方面，起到了不可估量的作用”<sup>2</sup>；还有一部分则“同西方的接触越深、越彻底，就越能促使当事人对本国的文化遗产产生自觉”<sup>3</sup>。而佐藤春夫则具有与那个时代大多数知识分子相似的共性，具备深厚的汉学基础、并接受了西方文艺的洗礼，但同时异国情趣中不断发掘着日本之固有传统。换言之，在佐藤春夫文学中不乏中国古典、西方文艺要素的同时，又并未抛弃日本传统要素，且表现出一定的传统回归倾向。

佐藤春夫的“中国趣味”促使他创作了诸多中国古典相关作品，不仅在创作初期翻译了中国汉诗作品集《车尘集》（1921-1929），还创作了《李太白》（1918）、《星》（1921）等以中国古代文人为题材的作品，并改编了《太平广记》《聊斋志异》等古典文学作品。由此可见，佐藤春夫的“东洋”认知主要源于对中国古典文学和传统文化的接受与理解，且其对中国文学的关注贯穿了整个创作生涯。同时，佐藤春夫的中国古典文学翻译、改写对于中国古典在日本近代的传播起到了积极地推动作用。日本文学评论家竹内好（1908-1977）便曾对于佐藤春夫的中国文学造诣给予了高度评价，称：“佐藤春夫先生的文学对于我们的文学运动来说是指针一样的存在。中国文学的翻译，可以说是始于佐藤春夫先生。”<sup>4</sup>

基于此，本论文旨在考察佐藤春夫的文学经历及其对中国古典的先关创作，厘清其“中国情趣”的缘起与形成要因。进而以其中国题材小说《李太白》为对象，分析佐藤春夫对中国古典文学乃至中国文人的认知，探讨该作品与日本传统要素“风流”之间的关联性，从而管窥佐藤春夫“中国情趣”的本质。

<sup>1</sup> 佐藤春夫. からの因縁・後記 [M]. 東京: 勁草書房, 1965: 283.

<sup>2</sup> 加藤周一. 日本文学史序説 下 [M]. 叶渭渠 唐月梅 译, 北京: 外语教学与研究出版社, 2011: 293.

<sup>3</sup> 加藤周一. 日本文学史序説 下 [M]. 叶渭渠 唐月梅 译, 北京: 外语教学与研究出版社, 2011: 297.

<sup>4</sup> 竹内好. 竹内好全集 第14卷 [M]. 東京: 筑摩書房, 1982: 56.

# 『何者』における SNS 空間のコミュニケーションのジレンマと人間関係の変容

宋婷 姚嘉祺（吉林大学）

2012年に刊行された朝井リョウの代表作『何者』は、第148回直木賞を受賞し、2016年には映画化もされた話題作である。本作は、Twitter（現 X）での投稿を物語の重要な要素として取り入れ、就職活動に臨む大学生たちの姿を描き出している。就職を目前に控えた若者たちの対人関係や将来に対する不安や葛藤が、現代的なリアリティをもって提示されている点に特徴がある。

本論文は、SNS、特にTwitter（現 X）という新たなコミュニケーションの形に着目する。具体的には、若者の中の「コミュニケーションのジレンマ」と「人間関係の変容」という二点から、SNSが現代コミュニケーションにもたらした影響を明らかにすることを目的とする。

まず、SNSにおける「匿名性」は、発言に伴う責任やコストを軽減するという認識を生み出し、無制限な言説を助長する傾向を持つ。しかし、この「匿名性」は本質的に不完全であり、常に発信者が発見される可能性を内包している。このような状況は、評価者と被評価者の関係において相互不信を生じさせる要因となる。

次に、情報の「断片化」によって、他者理解の不完全性が生じる点に注目する。SNS上の情報は、内容の希薄化や高度な同質化、さらには文脈の欠如といった特徴を有しており、これらは他者認識を表層的かつ片面的なものにとどめるだけでなく、意味解釈における齟齬を生み出すことにもなる。

さらに、SNS特有のコミュニケーション様式が人間関係の変容を促す点を指摘する。やり取りの非同時性、観察者の不可視性、そして他者の視線を意識した自己呈示の操作といった要素は、現実の対面関係とは異なる関係構築のあり方を生み出しているのである。

以上の分析を通じ、本論文は、『何者』という現代小説においては、Twitter（現 X）をはじめとするSNSの普及がいかに関係の構造を変容させ、人間関係にどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。これにより、SNSという視点から『何者』を再解釈し、その現代的意義を再定位することを試みる。

## 《亲自为我拭去泪水之日》中的颜色隐喻探究

肖冰冰（马鞍山学院）

颜色隐喻作为隐喻的一种形式，指借助颜色理解其他抽象概念。该理论被视为使抽象主题具象化、展现人物内心世界的关键方法，并已应用于文学作品分析中。大江健三郎作为日本现代文学史上极具影响力的作家，其文学作品始终贯穿多样的隐喻思维，同时多部作品中体现出对色彩运用的重视。目前，学界针对大江健三郎文学作品的隐喻表现已有诸多研究成果，相关探讨多围绕其作品的主题隐喻、叙事隐喻等展开，但对于其中后期创作中颜色隐喻的系统性探究仍存在明显欠缺，尤其缺乏结合理论对具体作品的颜色隐喻和主题表达进行研究的深入研究。

大江中期小说《亲自为我拭去泪水之日》作为其初期批判天皇制作品的延续与深化，作品中运用了丰富多样的颜色隐喻，营造出晦涩深沉又极具张力的文本观感。该作品以批判天皇制为核心主题，尤其在涉及父亲（天皇的象征）和天皇本身的描写中，紫色、黄色等色彩频繁出现，成为分析人物的重要线索。这些反复出现的颜色描写并非偶然，而是与作品的主题表达、人物的精神状态紧密关联。这些颜色描写分别有何隐喻内涵？作者又是如何通过颜色隐喻来表达核心主题、展现人物内心世界的？本研究基于以上问题，尝试梳理《亲自为我拭去泪水之日》中各种颜色的出现频次及具体场景，并运用颜色隐喻相关理论，深入分析颜色描写与作品主题表达之间的内在关联。

本研究采用文本细读法与统计法，分四个部分展开探究。第一部分统计色彩词汇。对作品中出现的所有颜色词语进行逐段梳理，完成计数、频率统计与排序，记录其所在句段，明确各类颜色词语的分布场景与出现规律；第二部分分析特征。以 Elliot 和 Maier（2007）提出的颜色情境理论为主要分析工具，结合具体叙事情境，逐一解读不同颜色的隐喻内涵，探讨人物内心世界之间的映射关系，挖掘颜色意象背后所承载的思想情感；第三部分探究主题表达。进一步梳理各类颜色隐喻之间的内在关联，分析各颜色隐喻的相互作用、相互补充所形成的隐喻体系，探究该隐喻体系在作品思想传达、氛围营造中的重要作用。第四部分得出结论。研究表明，颜色词语的频率分布与隐喻运用，是大江健三郎表达主题思想的重要手段。冷色调的高频使用，凸显了军国主义教育与天皇制对个体的精神摧残；少量暖色调的穿插，暗示了救赎的可能性。通过颜色隐喻，作品的核心主题得以深化，主人公的内心世界得以立体呈现，同时印证了颜色隐喻理论在文学文本分析中的有效性，为日本现代文学的隐喻研究提供一定参考。